

日刊 労働千葉

8.7. 7. 3
No. 2592

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五六（公衆）〇四七二二二七二〇七

その3 差別選別につながらる小集団粉砕活動

当局は、七月五日・日曜日、幕張・習志野電車区構内で「グリーンキャンペーン」の一環として「お客様へのサービス」と称し、イベントを開催しようとしている。
組合には、何の提案もせず、労働条件も明示せず、しかも、日常的に入出区や入換作業がひんばんに行われている構内で、子供達に「体験運転」を行わせたり、「電車とのつなひき」をさせたり、ジュース・焼そばの販売やバザーを行うなど、危険きわまりないサービスならぬうわつらだけのイメージアップを行うこと自身重大な問題をばらむものである。しかし、最大の問題は、これが「小集団活動」に大々的なマル生運動の組織化の一環として、労務政策、労働者差別支配の目的をもって行われようとしていることである。

外向きは「サービス」 実体はゴマスリ大会

当局は今、あらゆることを勤務査定の対象として労働者を差別し、労働者同志を競い合わせ、蹴落とし合わせ、5%アップなどのわずかばかりの買収金と恫喝で当局に仕つぽをふる労働者をつくり出そうとしている。このイベントも、外向きはサービス、実体は「小集団」を中心としたゴマスリ大会である。

実際当局は、「希望者が参加してくれればいい。強制はしない」といつつ、組合の追及に対して「参加すればその実績はのこる」と「非参加者は差別するぞ」と露骨にいいはなっているのである。

さらに、津田沼運転区では、動労「本部」組合員については本人が全く知らない者まで当局が勤務変更し、イベントに参加させるということまでおきている。当初、「希望のあった者だけ勤務変更した」といつていた当局は、この点を追及されシドロモドロとなり、結局「小集団だから入れた」と「小集団」や動労「本部」は特別扱いするということを公然と認めたのである。

この事実を見れば、当局がこのイベントをいかに考えているかは一目瞭然である。

「グリーンキャンペーン」の実体

そもそも当局は「グリーンキャンペーン」と称するその計画のほとんどを「ただ働き」で行わせようとしているのである。運転関係では、公休振り替え、勤務変更等で対応しており、まだそこまではいっていないにしろ駅などでは、すでに「ただ働き」があたりまえになっている。「JR千葉ニュース」3号などは、「ただ働き写真集」である。「ただ働き」などという今の世の中では考えられないような違法行為が「新会社」内では「自

主的活動」「美しい行為」としてまかりとおっているのである。しかも、駅に配転された仲間の話しによれば、これと年間四五万円の増収ノルマの強制があり重って「ただ働き」はおろかノルマ達成のために全く必要のない切符を自ら購入し、自腹を切つて手数料を払って別な窓口で払い戻す、などということまで行われているというのである。

いかなる差別も、差別につながる 行為も認めない

こんな状況のなかで行われるグリーンキャンペーン、イベントなど、われわれは絶対に認める訳にはいかない。当局は、労働者同志を互いに競い合わせ、蹴落とし合わせることができれば労働組合など骨抜きにできることをよく知っているのである。われわれは、いかなる差別も、差別につながる行為も認める訳にはいかない。

労働者が仲間同志の信頼と連帯を失つたらおしまいである。だからこんなイベントを認める訳にはいかないのである。また、清算事業団十二名の仲間が首を切られ、多くの仲間が強制配転されて歯をくいしばりながら闘いぬいている状況のなかで、こんなうわべだけをとりつくるう、みせかけの「サービス」など、断じて認める訳にはいかない。

「JRの鉄道には労働者の血が飛び散っている」（野田峯雄）、また、大量の首切りと広域配転などの組合潰し攻撃によって「危険が走っている」というのが現在の「新会社」の実体ではないか。

この現実をうかれあがった「イベント」などで塗り隠すようなことを、われわれは断じて認めない。

7.5 団結地引越
網大会へ集まろう